言葉が通じなくても互いに届く
想いと変化が綴られたリアル

The Real Face
Movie Special

取材・文／山田涼子　撮影／石川奈都子

長谷川京子

HASEGAWA KYOKO

決められたセリフのない監督独自の撮影現場

「殯の森」で'07年カンヌ映画祭グランプリを受賞した監督・河瀬直美の最新作は、故郷である奈良を飛び出し、タイにて撮影された。30歳の彩子が、日常を離れタイで七つの夜を過ごすうち、古式マッサージに触れ、癒しを得ながら、新しい自分に出会う再生の物語だ。その全国ロードショーに先駆け、ヒット祈願を行った奈良・法華寺にて、主人公・彩子を演じた女優・長谷川京子と対面する。

昨年、監督にインタビューをしたときもフィルムの話に触れたが、今作も「殯の森」以上にザラついた手触りさえ感じさせるようなフィルムの質感（粒状感、のようなもの）が全編を貫いている。そのフィルム世界の中で、彼女はこれまでのドラマや映画などで見せてきた顔とは違う、様々な表情を見せている。慈しみ、困惑、怒り、恍惚、脅え、憂い…。その全てが森の緑や雨、空気や湿度に溶け込んで、彼女を美しく佇ませる。それは、監督独自の撮影方法によるところが大きいと彼女は言う。「もちろん、頭の中に漠然としたプロットはあるものの、それはあくまで話の軸だけで、いわゆる台本というものはない。その日その日、何をするか、どんな流れになるのか、細かい部分は分からない」となれば、フィクションの狭間にドキュメンタリーが潜むようなもの。「その場で脚本が軌道修正されていくこともありました。毎日撮影前に、監督から一言二言指示がある程度で、動きの段取りだけを知らされるんです。『あそこの靴屋に行って、ピンクの靴を買ってきて』とか」。いままで触れたことのない進行に、最初は、正直戸惑いもあった。「決められたセリフがない、決められた役もない。そうすると、自分の生の声で、生の言葉を発さなくてはいけない。普通は与えられた『役』というヴェールを羽織った上で、話し方であったり、考え方といった取っかかりから演じていきますけれど、そういったものが全くない中で表現していくことは、私にとって一番の試練でした」。

限りなく「素」に近い繕わぬ彼女を捕える瞬間

そういった演出方法の中に身を置けば、思わず「素」が垣間見られることも。「カメラが向いている以上、100%の素なんてもちろんないけれど、瞬発的な衝撃に対するリアクションというのは素かもしれない」というのも然るべき。何となくの流れだけを認識している中で、「彩子」よりも「長谷川京子」が飛び出したのが、グレッグ役のフランス人俳優・グレゴワール・コランに頬を叩かれたときだ。「プロットにあった気はするけれど、実際それが現場で起こりうるかどうかは分からない、という曖昧さだった」と、ロケ時を思い出しながら彼女は続ける。「あのシーンは何回かテイクを重ねていて、2回目、3回目も来るというのが分かってはいても…」と、しばし間を取り、慎重に言葉を紡ぐ。「だけど、分かっていても…、殴られるって、何回殴られても頭にくるし（笑）」と、あえての明るい表情。「殴られた瞬間の自分の行動は、本当に素でしたね。映像に使われてる部分を見て、可笑しくて笑っちゃったんですけど、殴られた瞬間のコンマ何秒後かに自分の手が出てて」。もはや演技ではなく動物的反射である。「ですよね。そこで痛い！ってうずくまれる自分がいないなぁって（笑）。その後も、使われてない映像ですが、相手がカメラの後ろに逃げてるのに追いかけてって足蹴りしたりするんですよ。手は誰かに押さえられてて、手が出せないから足を出してる。それを見て、直美さんが『私と一緒や！』って笑ってました」。

何となくのニュアンスを感覚で拾っていく作業

現状を打破するため、何かをするとしたら？「手当たり次第ですね。自分が満たされてないときに何となく選ぶ手段は感覚でしかなくて、それが旅だったり、新しい人に会うとか、人にいっぱい話すとか」。その時々で感じたことに対して忠実に動く。彼女は自身を「感覚的タイプ」だと評す。勉強して何かを入れるよりも感覚で動いた方が「間違いがない」と。感覚VS感覚で、互いの理解を深めていくのは、さぞ骨が折れることではないか、と推測すれば、「不条理なこともなくはなかったけれど、感性で作品をつくっている以上、他人との相違点はあって当たり前だし、幸いにも言わせてもらえる環境があったので、言って何とかなることなら言って、そういう次元じゃないなら、もう勢いでやっちゃえ！みたいな（笑）」。それは監督のつくりたいものへの愛情や誠実さ、その揺るぎなさをひしひしと受け取っていた彼女だからこそ。

全編を通して、監督からの泣きの指示は一度だけ。ぼんやりとあるバックボーンから得た「彩子」として見せる涙は、どれも彼女の内から湧き出したものだ。自分を取り巻く環境に嫌気が差して、これといった理由もなくタイへ来た自分。面倒くさいと思いながらも、何となくで生きてこられる国で、何となくやれてしまう現実。日本を飛び出してきたことさえも「甘え」に過ぎないと思い始めたころに、「日本はキレイか？」と問われ、自身の卑怯さや浅はかさが恥ずかしくて涙を浮かべる物語中盤のシーンは、一つのクライマックスだ。

異文化の坩堝たる現場で「ファミリー」であること

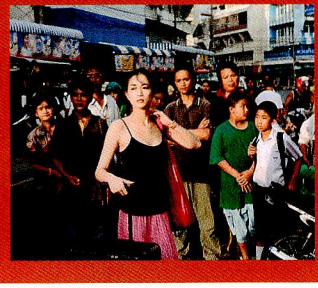
物語の中で、ネックになっているのが言葉の壁だ。異なった文化を持ち、違った環境で生きてきた人間たちが理解し合うために、互いに言葉を重ねて、コミュニケーションを図ろうとするものの、なかなか思いは伝わらず、苛立ちが募る。それは、撮影現場でも同様だったのか。日本語、仏語、英語、タイ語が飛び交う現場では、意思の疎通に困惑することも少なくなかっただろう。だが、「実は、現場でのコミュニケーションについて苦労したことはあまりなくて、分からないことは言葉じゃなく、裸でぶつかり合うしかないなって思ってました。湿度とか、肌の触れ合う感じとか」と、「感覚派」を自認する彼女らしい言葉。

インタビュー中も、一つひとつ、言葉を丁寧に選ぶ姿が印象的だった。元来の性格もあるだろうが、河瀬監督の現場でより一層、言葉に対する感覚が研ぎ澄まされていったのかもしれない。どれだけ芝居をしようとしても、人と人との距離感はリアルなもの。必要な距離感をつくるため、出番がなくても現場に身を置き、一緒にごはんを食べて、ファミリーになろう。それが河瀬組の信念だったという。その信念は、確かにこの物語の核たる部分を貫いている。

長谷川 京子（はせがわ・きょうこ）

1978年7月22日生まれ。'99年、女性ファッション雑誌の専属モデルとして活動開始。'00年、女優デビュー。主な出演作品に、ドラマ「華麗なる一族」（TBS・'07）、「海峡」（NHK・'07）、映画『美しい夜、残酷な朝・box』（三池崇史監督）、『愛の流刑地』（鶴橋康夫監督・'07）など。公開待機作として、『レイン・フォール／雨の牙』（Max mannix監督）がある。現在ドラマ「SCANDAL」（TBS・日曜21:00～）に出演中。

Information



【上映情報】

■11.1（Sat）～
■京都みなみ会館、他
※京都みなみ会館は11.8（Sat）～ 初日、河瀬監督の舞台挨拶予定
■監督：河瀬直美（『萌の朱雀』『殯の森』）
■脚本：狗飼恭子　河瀬直美
■出演：長谷川京子、グレゴワール・コラン、キッティポット・マンカン、轟ネーッサイ、轟ヨウヘイ、村上淳、他
■http://www.nanayomachi.com

The Real Face
Movie Special

重要なのは、答えを出すことではなく「考え続けること」だと伝えるために

前田 哲
MAEDA TETSU

残酷であっても必要なイニシエーションを描く

この物語の、そもそもの発端であるテレビドキュメンタリーを観た際、「これは映画にしたい」と、監督・前田哲は思ったようだ。おそらく監督が考えたのは、この映画を通して、人間が生きていく上で避けては通れない様々な問題を、世の中に問えるのではないか？ そして、その問いを「考え続けることが大事である」ということを未来に遺してゆけるのではないのか？と。例えそれが答えの出ない問いだとしても。

「殺す相手は誰でもよかった」という連日の事件の報道については、『〝生きる〟という事に本当に意味はあるんだろうか？』と、僕らは突きつけられてると思うんですよ。そしてその問いかけに応えるのがクリエイターの使命だとも思います。『命は大切です』と繰り返すだけでは何も届かない。どうやってその想いを届けるか考えた時、それを僕は、映画で示したかった」とも。

小学校の新任教師が一匹の豚を「食べること」を前提に児童に飼わせる。1年を共に過ごしたその豚を本当に食べられるのか？ という形で、この映画は「命」の意味を問う。

原案は、京都市山科区にあるミネルヴァ書房刊。現在は佛教大学教育学部にて教鞭をとる著者は、元小学校教師で、自らの教育体験を綴ったドキュメントだ。

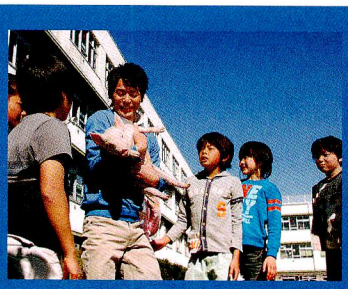
撮った本人が「印象的だった」と振り返るディベートシーン。リハーサルや合宿を重ね、感情を言葉にして伝えること、話し合って答えを出すことを課してきた子どもたちの成長ぶりに感嘆した。監督曰く「立場の違う者への思いやりであり、想像。あの子たちは生きていく上で何より大切なことを身をもって知った。確かに残酷な物語かもしれない。でも人は傷つかないと成長できない。自分が身を持って痛みを経験するからこそ、相手の痛みを想像できるんです」。

子どもたちにとっての「星先生」と「Pちゃん」

実際に体験して、感じて、考えて、そこから出る言葉と涙だからこそ、響く。そんな子供たちの感情の揺れを穏やかに見守り、ときには厳しく叱り、そして正しいと信じる道へと導いた妻夫木聡。子供たちにとって彼はテレビや雑誌で見る有名人ではなく、「星先生」だった。子供たちの撮影が全て終了したとき、「ひとりが妻夫木君の胸で泣きいてね。それを見て彼も泣いて、僕も泣きました。そして、子どもたちが『スマイルアゲイン』（卒業式シーンで歌う曲）を歌い出したんです」。想像するにメイキングは必見だ。「掴み合いをしろとは言ってないのに本気でケンカを始めて慌てて止めたり、号泣するかなと思ったシーンであえて涙を我慢したり。本当に彼らは愛おしかった」。

生徒26人＋教師1人＋ブタ1匹、全員が主役。その1匹であるPちゃんの存在が名シーンを生んだことも確か。「食べる」「食べない」。人間にとって、最も簡単な（もしくは身近な）選択のひとつである。この作品を観た人の心に、そこから何かが届くのだろう。

Information



【上映情報】
■11.1（Sat）～
■京都シネマ他
■監督：前田　哲
■原案：「豚のPちゃんと32人の小学生」
黒田恭史著（ミネルヴァ書房刊）
■出演：妻夫木聡、26人の子供たち、大杉漣、田畑智子、
池田成志、原田美枝子、他
http://www.butaita.jp/

© 2008「ブタがいた教室」製作委員会

前田　哲（まえだ・てつ）

'98年に相米慎二が総監督を務めたオムニバス映画「ポッキー坂恋物語・かわいいひと」で監督デビュー。「sWinG maN」（'00）、宮崎あおい主演「バコダテ人」（'02）、キングコング主演「ガキンチョ☆ROCK」（'03）、「陽気なギャングが地球を回す」（'06）、松山ケンイチ主演「ドルフィンブルーフジ、もういちど宙へ」（'07）などの作品がある。

ハンサム谷原×ブサイク塚地ありきの「スカッとラブコメ」が生まれた理由

英勉
HANABUSA TSUTOMU

素っ裸でもカッコイイ それが英流「ハンサム」

着るだけでハンサムになれるスーツ。そんな便利なものが本当にあるなら、着てみたいと思うのが外見コンプレックスを持つ男の正直な気持ちではないか。主人公・琢郎もそのひとり。数着のスーツを試し、選んだ一着でハンサムに大変身。「谷原さんって面白いよね、ってとこからスタートした話。最初はスパイものを考えたけど、お金がかかるからダメってことになって、じゃあ谷原くんがハンサムなスーツだったら…と」。

脚本担当の鈴木おさむ氏の一言で、ブサイクな琢郎には『僕らは『清潔なブサイク』って呼んでます（笑）」というドラドラ・塚地。「実は琢郎って、外見以外は優しくていいヤツ。好きな料理で自信を持って仕事をしていて、その料理でたくさんの人を幸せにして、皆に好かれてる。守る家があって、母親を大事にしてて…ね、いいヤツでしょ」。

外見以外はハンサム。なら、「ハンサム」の定義とは？「素っ裸になってもカッコイイ。イケメンはそこらへんウロウロしてるでしょ。コンビニの前に座ってたり、原チャでフラフラしてたり。でも、ハンサムっていうのは、出会った人や見た人を違う世界に連れてってくれそうな、ちょっと浮世離れした感じ？」と雄弁な英監督に、「自身は？」と問えば、「ないっスねー（笑）」と即答。「ほんま全くモテへんかったから、思い出すだけで腹立つくらい（笑）。だから琢郎の気持ちはすごい解る！」

ベタつかないよう目指した 湿度の低いラブ★コメディ

一見、正反対な谷原と塚地が、何の違和感もなく同一人物に見えるのは、ハンサムになってからも琢郎としての雰囲気や仕草が細かく表現されているからだ。「（琢郎は）30年以上ブサイクでやってきて、急にハンサムになってもそれを活かしきれない。そのオドオドした様子や言葉遣いとか、キャラ形成については撮影前にいっぱい話しました。どんな喋り方をするのか、合コンに行ったらどんな感じか、歩き方やクセまで」。キャラ設定はもちろん、ギャグや細かいシーンについても、何度となく鈴木氏とやりとりを重ねてシナリオを練り込んだだけのことはある。

また、ヒロイン・北川景子には、ある指示が出されていた。それは「ギャグ禁止令（笑）。作中で一番大事なことを言うキャラなんで」と言うものの、実は「内緒でこっそり入れてて、そのシーンを見る度、ひとりで笑ってます」。その数、4ヵ所。ぜひ見つけてほしい。「MOVIXでこの映画を観て、飯食って、『俺にハンサムスーツ着てほしい？』『え～、いまのままでいいよぉ』なんてアホな会話しながら新京極を歩いてほしいですね（笑）」とは、京都出身の彼らしい表現。「観た人がスカッと気持ちよく『おもろかったな～』って言える湿度の低いラブコメを目指した」だけあり、脇役の性格や態度、セリフまでも計算した結果が、ベタつきを有するか否かは、観た者の判断に委ねられている。

英 勉（はなぶさ・つとむ）

'68年京都生まれ。京都産業大学卒業後、東北新社に入社。'96年にはCM企画演出部に配属され、年間30本以上のCM制作を担当する売れっ子職人ディレクターに。関西出身ならではの「笑いと涙」をベースにしたストーリーテリングとハイクオリティな映像づくりに定評あり。近年では、TVドラマやPVなど幅広い映像作品に挑戦し、本作が待望の初長編作品。

Information

【上映情報】
- 11.1（Sat）～
- MOVIX京都、他
- 監督：英 勉
- 脚本：鈴木おさむ
- 出演：谷原章介、塚地武雅（ドランクドラゴン）、北川景子、佐田真由美、大島美幸（森三中）、他

http://handsome-suits.com/

© 2008「ハンサム★スーツ」製作委員会